

二〇一一年三月一日という日付を、この半年、私たちはどれだけ目にしただろう。そして、そのたびになにを考えたか。あるいは、なにを考え続けたのだろうか。

震災と原発事故から半年、ひとつの（あるいはふたつの、そして無数の）出来事をめぐって、私たちは気づけばあまりに多くの言葉に触れてきている。

みずからが目にしたこと、耳にしたこと、考えたことを伝えるための、さらには直後の呆然とした沈黙の記憶を埋め合わせるように、あるいは言葉に触れ続けることで現実から逃れるように——つまりは、あの三月一日に起きた／三月一日から起きている大きな出来事に対するための——手段として、私たちは語り（家族や友人と、職場の仲間と、仕事相手と、行き合わせた見知らぬひとと）、読み（新聞を、雑誌を、手紙やメールを、ネットの記事を）、そして書いて（ブログを、手紙やメールを、原稿を、ネット上の言葉を）きた。

手段として用いられた言葉のいずれもが、ときに私たちを昂らせ、ときに落ち込ませ、ときに哀しませ、ときに安堵させ共感させただろう。ときに沈黙すらも「反言葉」としてやはり手段となったのだ。

その先には、乾いた忘却や倦怠であれ、いまなお生々

しい失意と怒りであれ、疲労と硬直と麻痺が訪れる。出来事ゆえにではなく、言葉が無数に用いられたことの反動ゆえに。

それがとうに訪れ始めていることに、あなたもすでに気づいているはずだ。

三月一日の後、そうした言葉の行き交いのなかで、もつとも臆病にしか振る舞えなかつただろう者たちがいる。言葉を目的として生きていたがゆえに、それを手段として用いることに躊躇い続けるしかなかった者たちが。「飢えた子供の前にながでできるか」という半世紀近く昔の問いを、それを問うことすら悩ましかつた者たちが。それら躊躇いや問いかけに、わずか半年で答えが出ようはずもない。

だが、言葉を目的としてきた彼らだからこそ、そこには言葉の疲労と硬直と麻痺に対して抗う術がある。忘却や倦怠を打ち消し、失意と怒りを鎮め、生々しさを言葉に取り返す術がある（それが無いのならば、やめてしまえばよい）。

闘争の、巡礼の、探求の一步は、そこから始まる。

